

序

紫式部学会会長 秋 山 虔

紫式部学会によって編集される『むらさき』誌の第三五輯（平成10年12月）に「源氏物語を伝え
た人々」の第一回「島津久基」が掲載され、以降、断続して連載されてきたこの評伝は、好評に
迎られつつ十回に及んだ。ここにこれまでの十篇に、折口信夫、武田宗俊の章および松尾聰につ
いての補章を加え、列伝体の源氏物語研究史という体裁の一書として本書が編集・刊行されるこ
とになったが、折しも期せずして、去る平成20年11月1日の「源氏物語千年記」の国際的祝祭を
承けた「古典の日」がやはり11月1日として制定されたことと、いみじくも呼応する事業となっ
たことが慶ばしい。

いったい「古典の日」の制定は、京都市に事務局を置く推進委員会を中心とする、その実現へ

向けての熱心な運動が実ったものであり、いわゆる議員立法によって提出された法案が衆参両院における全会一致によって決せられたものである。

ここにいう「古典」とは、文学・音楽・美術・演劇・演芸・生活文化その他の文化芸術、学術または思想の分野にも及ぶ古来の文化的所産と定義されており、当日には国民の間に広く古典についての関心理解を深めるべく、国及び地方公共団体が、この趣旨にふさわしい行事を実施すべく努めること、家庭、学校、職場、地域その他さまざまな場において、国民が古典に親しむことのできるよう、必要な施策を講ずるよう努めるものとする、と「古典の日」の関係行事の実施を勧奨している。

この法文には「古典に親しむ」「古典を広く根づかせる」「古典についての関心と理解を深める」等々の文言が見いだされるが、いかにも型通りの文言であり、その方途については関係者の見識、力柄の間われるところであろう。

いったい古典とは「過去と現代のあいだ、つまり過去にそくするとともに現代にもそくするというほかない」、「その作られた時代とともに減びず、現代人に対話をよびかけてくる潜勢力をもったもののみが古典である」とは西郷信綱氏の説明であった（『日本古代文学史』改稿版、序説、昭和38年）。

いかにも、この的確な説明が反芻されるにつけても、そのような古典との対面が無為無策で可能ならばなく、そのための姿勢を固め、そのための術方の体得が要求されることになろう。あらまほしきは先達である、といわざるを得ないのである。

近代の源氏物語研究史に炳乎たる存在として知られた先学諸氏それぞれの独特の学風と人格に光を宛てる執筆者諸氏の作業から、読者は源氏物語に限らず古典の世界といかに対面すべきかを教えられるに違いないが、いうまでもなく先学に対する尊崇は、その偉業への盲従ではなく、批判的継承によってこそ実りの期せられるのであろうことはいうまでもない。本書が読者諸賢によって十分に利用されることを切望するものである。

目次

序……………紫式部学会会長 秋山 虔 1

島津久基——『源氏物語』攻略のために命燃え尽きた鬼才——……秋山 虔 7

折口信夫——日本の小説の持つべき主題——……長谷川政春 29

池田亀鑑——源氏図書館構想——……柳井 滋 55

風巻景次郎——『源氏物語』と正対への工程——……秋山 虔 83

山脇 毅——篤実の人・実証の源氏学——……増田繁夫 103

武田宗俊——源氏物語成立過程論——……宮川葉子 127

岡 一男——語り継ぎ、言ひ継ぎ行かむ——……井上英明 157

略縁起 — 柳井先生からの賜り物 —

ご存じの通り、本書は『むらさき』連載の「源氏物語を伝えた人々」(I-X)が幹となり、これに「折口信夫・武田宗俊」の両博士が加わったものである。読み応え十分のかたちで結実したのは、ひとえに執筆諸先生のご尽力による。そして、成蹊大学名誉教授柳井滋先生のご発言から芽生えた若木が、百尋の大樹に成長した結果でもあることを、企画誕生に立ち会った者の思い出草として、いささか書き留めておきたい。

紫式部学会理事柳井先生とは、春夏の理事会と冬の講演会の後、ご自宅最寄りの百合ヶ丘駅まで、ご一緒するのが例であった。車中、真面目かつ温厚な先生は、もっぱら学問の話をされ——碩学太田晶二郎の未刊原稿のことは詳細にうかがっておくべかりしか——言、俗事に及ぶことはなかった。たしかな記録がないので、しかと年月日を示し得ないのは誠に遺憾ながら、おそらく平成9年夏の理事会——七月初旬の土曜——か、12月の講演会の、その帰途であつたらう。近代の源氏物語研

究者について、簡略な記述でも残しておかないと、風貌や声使いや挙措、あるいは時代を同じくして生きた人々への影響など、その為人^{ひととなり}を理解する上での大切な手がかりが消え失せてしまつ、警咳に接した方の手になる伝記がほしい、と言う趣旨のお話があった。これを翌10年春の理事会にて事務局提案、『むらさき』の続き物として掲載が決まったのである。もともと、先生は車中のご発言をすっかりお忘れのご様子で、「僕、そんなこと言ったかなあ」と、しきりに頭を掻いていられたのも、懐かしい光景である。

第一回「島津久基」（第三十五輯）は、秋山会長にお願いすることとなった。当時、ご健康すぐれず入院加療もされていた柳井先生の、第二回「池田亀鑑」（第三十七輯）が誌上を飾ったのは、二年後である。先生は律儀に平成14年度・同17年度の講座講師を担当され、源氏物語千年紀すなわち平成20年3月27日ご逝去。ご葬儀は町田にて執り行われた、と記憶する。

『むらさき』の熱心な読者は、「源氏物語を伝えた人々」が必ずしも連続して掲載されなかったことに気付かれ、また不審にも思われるであろう。それは、叙する方叙される方両面での人選難航、あるいは執筆辞退と変更など、打ち明けてみれば、どこにでもありそうな楽屋事情によるが、どうしても書いておきたい次の一件は、惜しんでも惜しみきれないものであった。

山田孝雄——あえて敬称を付さず——を「源氏物語を伝えた人々」の対象とすることがやつと決まり、山田俊雄先生に多少ご縁のあった某からご依頼、何通かお手紙をさしあげご承諾いただいた玉稿到来を心待ちにしていたところ、平成17年7月16日、亡くなられてしまった。不世出の学者をそのご子息——稀代の名文章家でもいらっしやった——が語る、誰もが待ち望んだであろう記事は、ついに一片の幻と終わったのである。

ともあれ、十二人の巨匠のそれぞれに陰影の濃いお姿がそれぞれの略伝から浮かび上がる、風趣豊かな「列伝体研究史」の縁起は、およそ以上の通り、ここにいたって、江湖博雅君子のご高覧を乞いたてまつると云爾。

（紫式部学会事務局担当 高 田 信 敬）